

はしがき

みなさんは、身の回りにある物で、外国から輸入されたものはどれくらいあると思いますか？ 思いついたのは、アメリカ製のスマートフォンやイタリア製のブランドのバッグ、そして、ドイツ製の自動車でしょうか。中国製の服・日用品やオーストラリア産の牛肉が頭に浮かんだ人も多いかも知れませんね。

では、日本の会社が製造したスマートフォンや自動車に、輸入は関係ないかという、決してそうではありません。日本の製品を作っている材料や部品がどの国から来たかということまでを考えに入れると、かなり多くの製品が輸入と関係があることとなります。製品を作るために、外国でされた発明の特許権について日本の会社がライセンスを受けている場合もあります。そして、食べ物は多くの割合で、外国からの輸入に頼っています（日本の食料自給率はカロリーベースだと38%しかありません）。たとえ日本で栽培された野菜や果物であっても、種や肥料は外国からの輸入であったり、牛や豚のエサが外国から輸入されたとうもろこしなどの穀物であったりします。ここまで考えると、輸入という国際取引に全く頼っていない「純国内産」の物は、実は本当に少ないといってよいでしょう。

輸入のことを考えると今話したようなこととなりますが、日本から外国へもたくさん物が輸出されているので、毎日、かなり多くの国際取引があって、この国際取引は、私たちの普段の生活や仕事を成り立たせるとても大切な社会の基盤になっていることが分かると思います。つまり、日々、多くの国際取引がスムーズに行われてはじめて、私たちは安心して暮らしていけるのです。国際取引がどのような仕組みで行われ、そのスムーズな実施を支える法の制度がどうなっているかは、グローバル化の中にある今の私たちにとってはとても重要で、国際取引法を学んでその知識を身につけて活用できることは、社会や国に大きく貢献できる力になります。

この力は、もちろん輸出入の貿易や国際運送、国際金融、そして国際技術移転などを仕事とする方々にとって必要ですし、一方で、メーカー、商社、物流業界、銀行・保険会社などを就職先として目指す学生たちにとっては、就職活動で大きな武器^{アイテム}になります。公務員志望の方も、国だけでなく、都道府県・市などの地方公共団体が地域産品の海外販売や外国企業の誘致などを支援する仕事を官民

挙げて幅広く行っている現状を目の当たりにすれば、国際取引法の「力」は自分に必要であると思うことでしょう。また、このような国際取引法の学びは、自分の身の回りにある物（たとえばスマートフォン）の「本当の姿」を、いろいろな角度から理解することにもつながります。

この本は、国際取引法の重要性をみなさんにできるだけ分かりやすく説明し、楽しく国際取引法を学べるようにしたいという思いを込めてつくられました。執筆者は、これまであまりなかった「です・ます調」で『国際取引法』をていねいに描くことに挑戦し、そのなかで、国際取引の現場をイメージできる写真や図表によるビジュアル重視で、「分からない」「難しい」をなくす工夫を積極的に試みました。また、専門用語の解説だけでなく、契約や債権・債務、私法や公法などの基礎知識のフォローアップも意識し、これまでと違った『国際取引法』の学びが、この本では実現されています。各章の導入部分にある《設例》を「つかみ」にして、**この章で学ぶこと**に進み、その章を解きほぐす学習課題を確認し、それから本論の扉を開けて国際取引法のそれぞれの^{ワールド}世界に入って行くスタイルは、みなさんの「知りたい」「分かりたい」にきっと応えるものだと思います。国際取引法の最新の動向や興味深い情報を取りそろえた「コラム」と「トピック」は充実のラインアップで、巻末には、この本で登場する条約や法律の条文、そして国際取引で利用される書類のサンプルが掲載されています。本を読んでいて条文などが出てきたときには、これらの資料はきっと、みなさんの良い学びをサポートすることでしょう。ぜひこの本で、国際取引法を通じて自分の「人材力」を高めて、自信を持って自分の未来・将来を幸あるものにして行ってください。執筆者一同、心から期待しています。

本書中の図版に関する著作物使用と写真の掲載については、国際商業会議所（ICC）日本委員会、博多港ふ頭株式会社、そして公益財団法人日本海事広報協会（掲載順）から許諾を頂戴しました。読者の理解とイメージ作りへの多大なご協力に、伏してお礼申し上げます。また、本書の刊行にあたっては、法律文化社編集部の方木和久様に変なお世話になりました。方木様の叱咤激励と粘り強い努力がなければ、本書の刊行は成し遂げられませんでした。ここに深く、方木様にお礼申し上げます。

2023年12月

執筆者一同